

# 瓊林49~100号 俳句・川柳 作者数と作品104句

本表では「瓊林」49~100号が収載する俳(柳)壇の作者数と作品104句の一覧を掲示した。俳句(川柳を含む)の作者は延べ881名、推定句数は1万句に及ぶ。私はこの中から会誌1冊につき2句ずつ選んだのが下記の表である。長崎に縁のある句を選び、作者の重複を避けた。

号数	刊行年月	作者数	瓊林俳(柳)壇作品(その1)		瓊林俳(柳)壇作品(その2)	
N049	1976(S51)/12	3	友送る一期一会や秋の暮	小島かおる(26)	原爆忌一本足の鳥居たつ	中山芦生(16)
N050	1977(S52)/5	5	すいと来て眉のなかりし雪女郎	森澄雄(33)	ゆりかもめつぎつぎに浮く波がしら	高橋勝一(17)
N051	1977(S52)/12	14	青葉風料理教室ちらと見え	水野克己(23)	夏帯や少女の腰の定まらず	山本行治(32)
N052	1978(S53)/5	8	五月雨や礎石に偲ぶ関所址	中山芦生(16)	早乙女のつぎつぎ水輪ふくらまし	酒井朱青(15)
N053	1978(S53)/12	6	京の花大原抜けて若狭路へ	土井清三(21)	命でも何でもあげる横すわり	木村驢人(18)
N054	1979(S54)/5	2	残りたる歲月いちし夜の秋	酒井朱青(15)	金木屋散り敷く道や夜の雨	酒井朱青(15)
N055	1979(S54)/12	6	コスモスの駅と云えるはふた昔	村山青颯(22)	透きとおるように老いてる舞扇	木村驢人(18)
N056	1980(S55)/5	3	長崎や蜀山人の月出でぬ	酒井朱青(15)	七五三双子の孫の晴れ着買ふ	溝口英夫(26)
N057	1980(S55)/12	5	夕霧の峰のぼりある紫苑かな	森澄雄(33)	ひとを忘れて一月の花時計	浦里菓子(31)
N058	1981(S56)/5	3	あるたけの菊になり酔え棺の友	清水勝見(32)	老いたれどまだ仕事あり秋日和	溝口英水(26)
N059	1981(S56)/12	4	麦刈りの鎌音がする耶蘇の島	浜田千敏(19)	石榴熱れ遊子溢るる紫禁城	西坂義郎(34)
N060	1982(S57)/5	2	鶴の棹なほ目にのこる宿にあり	溝口英水(26)	菊人形今年は女太閤記	溝口英水(26)
N061	1982(S57)/12	8	緑蔭に処を得たる恩師の碑	谷山安広(25)	長崎へどの道とるも曼珠沙華	平尾圭太(38)
N062	1983(S58)/5	7	秋扇言葉使はず控え目に	西山淳次(旧職)	丸山は昔の廓春時雨	塚原仁(16)
N063	1983(S58)/12	15	長崎は華僑のふるさと蘭盆会	広瀬釣仙(30)	減りて行く同級生や喜寿の春	山口北千(21)
N064	1984(S59)/5	24	啓蟄の目高水底より浮きし	樹屋九秋(14)	冬日浴び故国想ふか異人墓	宮内興一(**)
N065	1984(S59)/12	16	子の代になりし事務所や秋桜	山口北千(21)	流灯の二手に分る眼鏡橋	平尾圭太(38)
N066	1985(S60)/5	14	玉探す龍頭秋の日に燃ゆる	渡部隆通(42)	マッチもて火入れの神事どんと焼き	渡辺久次郎(27)
N067	1985(S60)/12	10	大虚子の佇れしはここ花芒	平尾みさお(**)	秋草を名のある壺のさり気なく	城平重憲(28)
N068	1986(S61)/5	14	故郷に墓も決まりて年迎ふ	小田義明(30)	支那盆の媽祖堂うらの蟬鳴けり	渡部隆通(42)
N069	1986(S61)/12	16	街の灯の遠明かりして無月かな	中塔虎彦(26)	枇杷咲いて茂木は閑かな港街	西山淳次(旧職)
N070	1987(S62)/5	18	原城址朝焼けすぎまじかりしかな	渡部隆通(42)	住職を寺の名で呼ぶ月の客	城平南山(28)
N071	1987(S62)/12	24	秋すでに掌にあり黒の楽茶碗	最上義満(38)	球児みな丸坊主なり炎天下	伊藤きよじ(19)
N072	1988(S63)/5	16	故郷の香り届きしザボンかな	篠崎嘉秀(G11)	原城の句碑立つけふや復活祭	広瀬釣仙(30)
N073	1988(S63)/12	13	早笛に鬼女舞ひ出づる薪能	渡部隆通(42)	夏帽子目深に齡覗かせず	西岡一彦(43)
N074	1989(H1)/5	15	寒禽の声寒林の声と聞き	松尾立石(G1)	母校さるわれにものみな暖かし	平尾圭太(38)
N075	1989(H1)/12	8	余命伏せて青葉の窓を開け	木村驢人(18)	生涯の余白を生きる残暑かな	山内醇(13)
N076	1990(H2)/5	9	まだ読まぬ本積み上げたまま米寿	木村驢人(18)	天道虫おもし纏まるまで飛ばず	清水鶴木(32)
N077	1990(H2)/12	9	墓守はわが代かざり曼珠沙華	城平南山(28)	京なれや春雨傘の女ゆく	溝口英水(26)
N078	1991(H3)/5	6	突然に秋が来るや掛蒲団	篠崎嘉秀(G1D)	風花をそのまま海へ坂下る	鶴谷栄一(27)
N079	1991(H3)/12	6	浮草は蜻蛉の来て流れ初む	松代愛汀(31)	はや闇に彩を休ませ初紅葉	中塔虎彦(26)
N080	1992(H4)/5	8	女人俑なべて豊類秋深し	城平南山(28)	六月の景色にまわす竹の笛	清水鶴木(32)
N081	1992(H4)/12	7	制止する妻もいて酌む桜の夜	清水鶴木(32)	阿闍陀坂しばし花火のこだま這ふ	渡部隆通(42)
N082	1993(H5)/4	21	初詣で禰宜も篝火燃やす役	志岐操六(24)	ほのぼのと湯の中にいる冬至かな	浦里菓子(31)
N083	1993(H5)/12	26	ネクタイを少し派手に敬老日	森内三三(39)	よく眠りよく物忘れ茗荷汁	城平南山(28)
N084	1994(H6)/4	26	客は皆威儀正しくて初電車	田中正道(44)	あやとりをして元旦の妻と孫	林かつみ(**)
N085	1994(H6)/12	26	紫雲英田に鶯の輪の影屋さがり	井上隆利(39)	夜を徹しおどりに耽る風の盆	溝口英水(26)
N086	1995(H7)/5	28	手袋のまま拍手朝歩き	佐藤重孝(34)	久々の卓袱料理冬灯(ともし)	渡辺久次郎(27)
N087	1995(H7)/12	29	片淵のグラウンド跣足になってみる	西岡一彦(43)	春四月大学院の幕を開け	赤間四郎(41)
N088	1996(H8)/5	31	元旦や夫の大きな下駄置いて	奈須禎子(**)	どうしても過去へ流るる秋の雲	出本勇(44)
N089	1996(H8)/12	30	前掛のたて結びなる苗木売り	金田けいし(**)	背伸びする兄弟げんか土筆の子	金田かんじ(42)
N090	1997(H9)/5	31	ワープ口に老妻いども夜長かな	松尾立石(G1)	まだ生きている事知らず年賀書く	佐藤重孝(34)
N091	1997(H9)/12	26	初蟬や樹下石上の世捨人	鶴谷栄一(27)	死生問うことを止めよと春の雪	長岡信夫(42)
N092	1998(H10)/5	28	昔日のままに花咲き母校亡し	水田安夫(G2)	庭見せや杓で振舞う今年酒	田中正道(44)
N093	1998(H10)/12	25	去年今年梵鐘の音の余韻まで	田村秀忠(27)	土石流走りし野面雲雀鳴く	平尾圭太(38)
N094	1999(H11)/5	27	長崎に残る検番舞初め	松尾みち子(**)	自分史の空転翳雲に乗る	清水鶴木(32)
N095	1999(H11)/12	27	正論の行方虚しさ走り梅雨	田村秀忠(27)	夏薊雨やりすごす薬師堂	本田ノブ子(**)
N096	2000(H12)/5	27	松山の旅に句を練る糸瓜の忌	志岐操六(24)	看板を書き二科展の夢捨てる	田村秀忠(27)
N097	2000(H12)/12	27	長電話切るに切られぬ孫の声	一ノ瀬剛(G4)	俯きて仰向きて落椿かな	松尾立石(G1)
N098	2001(H13)/5	29	木犀の香を貰いけり散歩道	山本助国(38)	良夜かな兔の夢を見しことも	立川裕子(“)
N099	2001(H13)/12	50	胸はずむシャガリの音や秋祭り	立川勇(42)	南蛮船渡来の潮路椿咲く	渡部隆通(42)
N0100	2002(H14)/5	43	大人びし孫の会話や春浅し	川村放石(G3)	行く秋や悠々自適なり難く	霜川孝一(G7)
作者数合計(人)		881	*上表は延881人の作品(推定1万句)から、私が任意に選抜した104句である。			